フレーベルの労作思想について

橋本 信子
(安田女子短期大学)

I. はじめに

フレーベルは、神性の発露を重要な課題とし、行為への教育を推進した。彼は、内界からほとぼしり出る創造的衝動や形成衝動を萎縮させたり損失させたりすることのないよう、年齢に応じ“行為すること”を要請した。遊戯と労作は、そのための教育手段であった。

フレーベルは、幼児期においては主として遊戯を、児童期以後においては主として労作を掲げていたために、彼の幼児教育を考えると、遊戯に比べ労作が見落とされがちであったと思われる。

今回の発表は彼の労作思想について概観し、労作に対してどういう取り組みをしたかを明らかにするとともに、幼児期の労作教育の痕跡を探っていきたいと思う。

II. フレーベルの労作観

フレーベルの労作観は、神性にもとづく世界観や人間観によって宗教的労作観を展開しているといわれている。

森羅万象をすべて神の創造物と考えるフレーベルは、神を創造してやまない存在、常に働く存在としている。神の仕事・行為・創造は、神の本性としての行いであり、それはまた神の模像・肖像である人間の本性でもあると考える。「よく勤めよく働くときは、われわれは神のようになることができ、すでに神に似たものとなれば、ますます純真に神を認めることができ、よく神の本質を洞察するに至るのである」(43)と述べているように、フレーベルにとって労作(仕事・行為・創造)とは一つに人間の本性を外界に発現させることであり、二つに神の本質を探ることである。

① 創造的衝動に基づく労作観

フレーベルによれば、行為は認識に先だって行われるものであるから、神の本質を遊戯・労作などのように身体的行為を伴うものを手がかりにして洞察しようと試みた。

その点において、フレーベルは遊戯と労作とを同系列の教育方法として位置づけている。両者はともに自己の内面を表現したもので、自己の内面的本質を外界にあらわしたものだからである。「乳児が感官を働かせたり、手足を動かしたりするのは、その最初の萌芽、最

初の身体的活動であり、その創造的衝動の発芽である。それから遊戯をしたり、ものを立てたり形造ったりするのは、子供が咲かす優しき最初の花で、これはまた、人間が将来の勤労、勤勉または生産活動に対して準備さるべき時期である」(46)と述べている。すなわち、創造的衝動や形成衝動を外界に表現することにおいて幼児期の遊戯と児童期・少年期・青年期の労作は同義なのである。

このように労作の教育的価値を大いに認めた結果、「児童というものは、またさらに進んで少年も青年も、どんな地位や素質のものでも少なくとも日に一時観や二時間は、一定の外部的作用を造り出す真面目な活動に従事すべきものである」(46)と述べたり、授業学課と並んで純粋作業(作業的活動)を数時間導入することを要請していた。このような考えは、ヘルバの計画案やカイルハウの学校での実践に見られる。

② 宗教教育としての労作観

先に述べたようにフレーベルは、労作を単なる労作として終わらせずさらに宗教教育にまで発展させて考えている。「作業や勤労を伴わない宗教はややもすれば空虚な夢想となり、無意味な迷信、内容なき幻想に走るような危険に陥りやすい。が、また同様に宗教を伴わない勤労や作業は、人間をして駄獣や機械にも等しきものとならせる作業と宗教とは、神すなわち永遠者が無窮に創造したる一の同時的のものである」(48)と述べているがごとくである。

彼の労作思想が宗教(彼の場合キリスト教)と密接な関わりを持っていることが明らかになったが、キリスト教における労働観は、旧約聖書の「創世記」に端を発している。

旧約聖書の「創世記」には、神によって創られたアダムとエバのエデンの楽園物語が描かれている。これによれば「主なる神は、人を連れて行ってエデンの園に置き、これを耕させ、これを守らせられた」(創世記2:15)と記されている。人が労働し、その働き場所を守ることは、神の召命であると同時に、嗣業であるとされているのである。さて、あまりに有名な出来事であるが「善悪を知る木からはとって食べてはならない」(創世記2:17)という神の戒めにもかかわらず、蛇の誘惑によりエバ、アダムは禁断の木の実を口にしてしまう。これ

が、最初の人間が最初に犯した決定的な罪、『原罪』であり、被造物である人間が、創造者である神の如くなるという大それた傲慢が、その罪の根源であるとされている。

この行為によって二人は樂園から追放されてしまう。この時、神は二人に言われた。「あなたは一生、苦しんで地から食物を取る。(略)あなたは顔に汗してパンを食べ、ついに土に帰る」(創世記3:17~19)。労働によってパン(日々の糧)を得ることは、神の祝福のしるしであると同時に、人間が犯した罪(原罪)への呪わしい呪縛なのである。したがって、労働には喜びと嘆きが伴うと解釈されている。

キリスト教は、原罪をきびしく受けとめ、人間の罪の許しを請いつつ労働することを信仰の重要な柱としている。それゆえ、怠慢を禁じてパウロは次のように述べている。「つとめて落ち着いた生活をし、自分の仕事に身をいれ、手ずから働きなさい」(テサロニケⅠ4:11)。「働こうとしない者は、食べることもしてはならない」(テサロニケⅡ3:10)。

フレーベルも同様に怠慢を禁じ、「自己の力を神の力として外部に実現したり、何らかの仕事に現わしたりすることを怠ったならば、(略)彼はいつの日にか必ず欠陥を感じるであろう」(45)と述べ、さらに怠慢の結果はいつか必ず現れることは地上一般の法則であるとまで言及している。

キリスト教では、労働は「内なる人」に肉体を支配させる手段であるといった考え方が根底にあって、近代資本主義的な意味での経済的労働、つまり利殖と結びついた商品・貨幣経済的な労働については、きわめて消極的である。フレーベルも同様に利殖として労作は好まない。「今日の人々は一般に仕事とか勤労とか、すなわち外的生産に対する活動生産事業とかについて全く誤った考えをもっている」(42)。「人間が働いたり事業をしたり創造したりするのは、ただ自分の身体を保持するため、すなわち衣食住のためであるというような考えは、一応黙認することはできるが、しかし実際妄想に過ぎないのであって、広く普及させることのできない、卑しい考えである。人間は、一つには自分のうちにある精神的・神的のものを自分の外に形造るため、二つには、これによって自分自身の精神的、神的本質および神の本質を知るために、創造するのである。そのことによって人間にえられるところの衣食住というものは第二位のものであって、主な目的に伴う無意味の附加物であるに過ぎない」(44)という記述からもこのことは読み取れる。

つまり、労働を人間の使命として受容する積極的側面と社会経済的労働という意味をもった労働に対する消極性の二面的な考え方をもっていることを指摘できる。言い替えるならば、werkenにたいする積極性とarbeitenにたいする消極性である。

Ⅲ. 労作への取り組み

① 母の歌と愛撫の歌

遊戯の歌のなかに、労働賛歌を見いだすことができる。具体的には、「足をばたばた」「チックタック」「草刈り」「たてよこに」「お菓子づくり」「炭焼き小屋」「大工さん」「小さな橋」「小さな園丁」「車屋さん」「建具屋さん」を挙げるができる。

② 園芸

フレーベルは、幼稚園に園芸のできる庭をつくることを奨励した。庭にたいする文献には部分的全体の思想が全面に出されてはいるものの、実際場面で子供が植物の世話にあたったことを考えれば、幼稚園における労作の一環と捉えることができよう。

③ カイルハウの一般ドイツ学園

子ども達はそれぞれ土地を与えられ単独あるいは共同でそれを耕し、収穫された生産物は市場価格で買い上げられた。また、1823、24年冬学期の時間割のなかで毎日の夕食後、年長の生徒たちのためには自由な仕事をする時間、年少の生徒たちのためにはドイツの民族説話の朗読あるいは物語を聞きながら機械的な仕事をする時間を組み入れていた。

④ マイニゲン侯爵に提出したヘルバの学園計画案

通常の学習(授業)だけでなく、肉体労働や指物細工や編み物や板紙細工等も教育手段として時間割に編成されていた。この計画案では、授業時間の半分(午前中)が授業にあてられ、残り半分(午後から夕食まで)は仲間と一緒に作業をすることにあてられていた。この計画は実践に移されることはなかったものの、その背景には労働への積極的な受容があることを指摘することができる。

Ⅳ. まとめ

フレーベルは労作を二つ点で奨励していた。第一には、人間の本性を外界に発現させることであり、二つに神の本質を探ることである。特に児童期以降の子供に労作を要請していたが、幼児にもおぼろげながらの予感を与えるものとして母の歌と愛撫の歌の作品のなかに、あるいは園芸という形で労作に取り組みさせていたことが明らかになった。

*本文中のカッコ内の数字は、フレーベル全集2巻による